

中山道宿場町探訪 第4回大垣宿

2025年6月28日9時集合、前日までの雨模様が嘘のような猛暑日になりました。ボランティアガイドの山本さんの案内で6名が歳もメグズ頑張って歩きました

奥の細道むすびの地記念館駐車場9時に集合し、山本さんから案内図を頂き、まずは「通行手形チケット 500円（記念館+大垣城+郷土館共通 700円の所を割引）」で江戸時代に描かれた絵図を見ながら散策を開始しました。このマスが通行手形です。



今回の「大垣宿」は中山道のルート上には属しませんが、中山道から東海道へと繋がる「美濃路（みのじ）」ルートは、江戸時代において東海道の「宮宿（現在の名古屋市熱田区）」と中山道の「垂井宿（岐阜県垂井町）」を結ぶ脇街道として整備された重要な交通路でした。古代には東山道の一部として機能しており、奈良・京都方面へ向かう際に利用されていました。江戸時代になって関ヶ原の戦いで徳川家康が凱旋し



た道として知られ、「吉例街道」とも呼ばれました。将軍の上洛や朝鮮通信使、琉球王使、お茶壺道中などの重要な行列もこの道を通りました。一方で東海道の「七里の渡し」（宮宿～桑名宿間の海路）は水難事故のリスクがあったため、陸路で安全に移動できる美濃路が

將軍の上洛や外交使節の通路として、また茶の運搬など物流面でも活用され、軍事・外交・物流の要所として機能し、地域経済の活性化において重要な要衝となりました。そして美濃路は沿道の宿場町（名古屋宿、清須宿、稲葉宿、墨俣宿など）と共に人や物資の往来で栄え、地域経済の発展に寄与しました。後の東海道本線や東海道新幹線、名神高速道路のルートにも影響を与え、美濃路の地理的重要性が近代交通網の基盤となり現代にも引き継がれています。このように、美濃路は単なる脇街道ではなく、政治・経済・文化の多方面で江戸時代の日本を支えた重要なルートでした。

奥の細道むすびの地記念館の南口からスタートし、美濃街道沿いに東へ向かい「高橋（たかはし）」まで行きます。元はお堀で「高橋」は荷を積んだ舟が行き来できるように橋が高く造られていたそうです。「谷木因（たに ぼくいん）」は、江戸時代前期から中期にかけて活躍した俳人で、1646年に美濃国大垣で舟問屋の家に生まれました。松尾芭蕉とは深い親交があり、大垣における蕉風俳諧の普及に大きく貢献しました。芭蕉が『奥の細道』の旅を終えた地として大垣を選んだのも、木因の存在が大きかったとされています。





「高橋（京都方面）・たかはし（江戸方面）」を渡り川沿いに北上し、「住吉燈台（江戸後期）」、「住吉神社」、「芭蕉送別の連句塚」を過ぎて「貝殻橋」に來ます。米や木材を「桑名」の方に運び、帰りは「ハマグリ」などの海産物を運んだそうです。この川沿いには商人たちの旅籠が有り料理に使った貝殻を無造作に捨てた為、貝殻で埋め尽くされました。「貝殻橋」の袂には「南いせ」の道標が残っています。もう少し北に向かうと「大垣城西総門跡（京口門跡）」に着き、いよいよ大垣城の入り口です。この門は、朝6時に開き夕6時には閉められます。とても厳しい門限が有りました。

②「飯沼欲齋先生邸跡」から③「つちや俵町本店」

飯沼欲齋（いいぬま よくさい、1783-1865）は、江戸時代後期の大垣藩に仕えた蘭方医であり、植物学者としても知られる人物です。大垣の医師・飯沼長顕の養子となって医術を学びました。その後、京都や江戸で蘭学や本草学（植物学）を修め、特に西洋の植物分類法に基づいた研究に力を注ぎました。代表作『草木図説』は、日本で初めてリンネの分類法を取り入れた体系的な植物図鑑であり、草部20巻は彼の生前に刊行され、木部は後に出版されました。私の大学時代の恩師「水野瑞夫先生」は飯沼欲齋先生の業績を深く研究されました。また、彼は1832年に岐阜県で初めての人体解剖を行ったことでも知られ、医学と自然科学の発展に大きく貢献しました。晩年は大垣郊外の別荘「平林荘」で研究と著述に専念し、その功績は現在も顕彰されています。ここから方向



を東に向けます。大垣城の堀之内を美濃路に沿って進みます。和菓子の柿羊羹で有名な「つちや（株式会社槌谷）」に辿り着きます。岐阜県大垣市に本店を構える老舗和菓子店「つちや」は、1755 年（宝暦 5 年）に初代・槌谷園助が創業した歴史ある菓子舗です。創業当初は「柏屋」の屋号で大垣藩の御用達として生菓子を納めていました。1838 年には 4 代目・槌谷右助が、岐阜特産の堂上蜂屋柿を使った名物「柿羊羹」を開発し、現在も看板商品として親しまれています。明治時代には竹筒入りの柿羊羹が考案され、1902 年の全国菓子品評会で一等賞を受賞しました。1939 年に法人化され、戦後は洋菓子部門の開設や工場の拡張などを経て事業を拡大。2015 年には、透明感のある美しい和菓子「みずのいろ」が SNS で話題となり、伝統と革新を融合させた菓子作りが注目されました。2025 年には創業 270 年を迎えます。



④ 大垣宿本陣跡

参勤交代における「本陣（ほんじん）」の役割は、主に次のようなものでした。

1. 大名の宿泊所

本陣は、大名やその上級家臣が宿泊するための特別な宿泊施設でした。一般の旅人が利用する旅籠（はたご）とは異なり、格式が高く、通常はその宿場町で最も立派な建物があてられました。



2. 威厳と格式の象徴

参勤交代は単なる移動ではなく、幕府に対する忠誠を示す儀礼的な行為でもありました。本陣はその行列の格式を保つための重要な舞台であり、大名の威厳を示す場でもありました。

3. 行列の拠点・指揮所

本陣は、行列の出発・到着の拠点としても機能しました。大名の家臣たちはここで次の行程の準備を整えたり、連絡を取り合ったりしました。



⑤ 大垣城「東門」

美濃路はさらに東へと続き、「問屋場跡」で北に折れます。本来は「高札場跡」に行き「西総門跡（名古屋口門跡）」に着き、ここから再び東に向かって「墨俣宿」に向かいます。今回は、「大垣宿脇本陣跡」に在る「田中屋せんべい」に寄り一時休憩を取りました。西に折れて「大手門跡」に在り、嘗ては夜の繁華街を過ぎて「名水大手いこ井の泉」でヒンヤリとした湧き水に手を入れました。すぐ隣の「金蝶園（昼食を食べてから水ようかんを買いました）」の横断歩道を渡り、「大垣城東門」に到着です。移築した門だそうです、門の上には大垣城がクッキリ浮かび、思わず「おお〜」と言っていました。

⑥「大垣城」と「黒鉄門跡」

「黒鉄門」は「本丸」と「二の丸」に掛かる橋に設けられた「本丸」側に在った最後の門で、敵方の矢や鉄砲弾を防ぐため鉄板が多く使われていました。現在は「鶴沼宿」の東に置かれている「黒鉄門」は、本来はここに在った事が解っています。大垣城は二重にも三重にも堀で囲われた要塞で、関ヶ原の戦いで籠城した西軍の脱出も、「本丸」に



有った松の木を倒してロープで堀に降り「たらい」で造った舟で脱出したと山本さんの説明が有りました。これが観光「たらい舟」の由来だそうです。

大垣城の変遷

大垣城は大文4年(1535)に宮川安定により創建されたといわれています。創建当初は水門川を利用した小規模なものでした。徳長元年(1596)、伊藤部族が城主の時に天守が造営されたといわれます。江戸時代になると、改修が行われ、現在のような4層4隅の天守となり、総堀が完成しました。城下には、美濃藩の宿場町である大垣宿や廻り川跡があり、人や物が集まる交通の要所でした。

◆天守

昭和11年(1936)に国史に指定された大垣城は、昭和20年7月29日、空襲によって焼失しましたが、国史指定時の写真や実測図をもとに、昭和34年に戦災復興の姿で再建されました。

◆石垣

石垣には市内東奥町・金生山麓の石灰岩が多く用いられています。石灰岩による石垣は厚く、2500年前の生物であるフズリナやウミシロ、ペレロファンなどの化石を見ることができます。天守西側の石垣には、金生吉次郎が築いた明治29年(1896)の大洪水の最凶洪水点のラインが残っています。

◆土塁跡

城西広場の西には竹ノ丸の土塁が残っています。城西広場は内堀と竹ノ丸の一部であり、大垣城の敷地のない遺構を見ることができます。

◆大垣藩戸田氏

徳川家康は三河時代からの近衛として仕え、徳川氏に城主であった戸田氏就が、寛永12年(1635)に入封し、大垣藩10万石の礎を築きました。戸田氏は治水事業や教育などに尽力し、明治に至るまで11代に渡り、約230年間、大垣を治めました。

◆東門

東門はかつての内堀門です。内堀門は明治の初期までは市役所近くに残っていました。その後、戸田家別邸の門として移築したため、天守再建に伴い、東門として再移築、整備されました。

◆寛永年間 大垣御城下図

この絵図には御城中の發展態に「輪郭御城 大高金右衛門」などと記されていることから、戸田氏就も築城した寛永14年(1637)の鳥居の位置後に築かれたものと考えられます。現在の大垣城下絵図のうち最も古いもので、江戸時代初期には天守の西側に3重の、東側に4重の堀があったことが分かります。

郷土館

郷土館は戸田公人城主の年記念事業として昭和60年(1985)に建設されました。歴代太田藩主・戸田家の顕彰を中心に、郷土大垣の歴史の風土を築きあげてきた先賢に関する美術品等を展示しています。大垣城とは共通でござんたいだしますので、併せてご覧ください。



(右端の方が、ボランティアガイドでお世話になった山本さんです)

⑦「郷土館」

「郷土館」では大垣藩 10 万石「戸田家」の歴史的展示物や朝鮮通信使のお面など貴重な資料が豊富で、大垣が如何に重要な地であったか認識を新たにしました。門をくぐると立派な庭園が有りました。四季を通じて写真映えする場所です。



⑧「奥の細道むすびの地記念館」



松尾芭蕉は、江戸時代前期の俳諧師であり、日本の文学と文化に計り知れない影響を与えました。『奥の細道』は、松尾芭蕉が1689年（元禄2年）に弟子の河合曾良とともに江戸を出発し、東北から北陸を巡って美濃国大垣に至るまでの約2,400km、150日間にわたる旅を記録した紀行文です。この作品の特徴は、各地の名所旧跡を訪ね、その土地の風景や歴史に触れながら詠んだ俳句と、それにまつわる随筆的な文章が組み合わされている点です。

旅の目的は、単なる観光ではなく、古歌に詠まれた名所（歌枕）を訪ね、自然や歴史に触れながら俳句を詠むという精神的な修行のようなものでした。芭蕉はこの旅を通じて、俳諧を芸術の域に高めようとしてしました。たとえば、平泉では「夏草や兵どもが夢の跡」、山寺では「閑さや岩にしみ入る蟬の声」など、今も語り継がれる名句が生まれました。彼の影響は、単なる俳句の技法にとどまらず、日本人の自然観や美意識、さらには哲学的思考にまで及んだと言われています。まず、芭蕉はそれまで滑稽や遊びの要素が強かった俳諧を、芸術性の高い文芸へと昇華させました。彼の句は、和歌形式の「5-7-5-7-7」を季語なしの「5-7-5」だけに短縮し、自然の一瞬を切り取ることで、深い精神性や人生観を表現しています。たとえば「古池や蛙飛びこむ水の音」は、静寂と動の対比を通じて、無常観や自然との一体感を感じさせます。



また、芭蕉は『おくのほそ道』のような紀行文を通じて、旅と詩を融合させた新しい文学の形を確立しました。この作品は、単なる旅行記ではなく、土地の歴史や人々の暮らし、自然の移ろいを詩的に描いたもので、後の文学や芸術に大きな影響を与えました。

もっと時間を取って、ゆっくりと楽しみたかったです。「奥の細道むすびの地記念館」でボランティアガイドを山本さんの丁寧な案内に深くお礼を言い、お別れをしました。

⑨「酒井亭：にしんそば」

昼食の場所には蕎麦で有名な「酒井亭（さかいてい）」を選びました。大垣市の老舗蕎麦店「酒井亭」は、1935年（昭和10年）創業の歴史あるお店で、特に「にしんそば」で知られています。実はこの店、東海地方で初めてにしんそばを紹介した店とも言われてお



り、地元の食文化に大きな影響を与えてきました。そのこだわりは、創業以来、代々受け継がれる「秘伝のだし」を使い続けており、北海道産の身欠きニシンを3日間かけて丁寧に煮込むという手間暇を惜しまない調理法が特徴です。看板メニューの「にしんそば」



は、ふっくらと煮込まれたニシンと、香り高い出汁が絶品で、この甘露煮と、店主自らが打つ蕎麦、そして昆布と鰹節の効いた薄口をつゆが絶妙に調和し、まさに“京風”の上品な味わいを楽しみました。他にも、「天ざるやなべやきうどん」なども人気で、季節ご

とのメニューも楽しめます。参加したメンバーは、各自銘々注文し、蕎麦屋の粋を超えて楽しめました。

(記録 第12期卒 坂井至通)